
if...

永遠 愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

if…

【Nコード】

N4885D

【作者名】

永遠 愛

【あらすじ】

「もしああたったら」「もしこつだったら」…そんな滑稽なことを何度考えたのだろう。

（前書き）

初 作品です（、） 駄文& a m p・駄作ですが、 アドバイス・感想など頂けると嬉しいです

もし、幼なじみじゃなければ…

もし、あんなに近くにいなければ…

もしも…

【i f…】

「紗良！俺、今日学校行かねえから！」

…朝。

制服に身を包み、“金子”と書かれた家のチャイムを押した。

そして、出てきた男からのこの言葉。

男は、寝起きでボサボサの髪、スエット姿でそう言った。

「…また？」

男は、ダルそうに頭を掻きながら続ける。

「おー、だってこれから亜弓来るし」

「そ…っか」

“亜弓”

この名前は、いつもあたしを苦しくさせる。

「お前は学校行くんだろ？ 氣い付けてな」

男は、ヒラヒラと手を振りながら、家の中へと入っていった。

あたしは、頭が働かないまま歩きだす。

あの男…金子悠はあたしの幼なじみ。

もう…何年になるのかな。

少なくとも、出会ってから15年以上は経っていると思う。

昔は、いつも一緒にいた。

一緒に登下校や、部屋の行き来なんて毎日だった。

だけど、最近変わってしまった。

高校に上がったのと同時に母親を亡くし、それ以来学校に行かなくなった。

…学校だけじゃない。

部屋からも、必要最低限しか出なくなった。

毎日毎日、“亜弓”という女と部屋で会うだけ。

亜弓は、悠の母親が亡くなり、悠が荒れていた時にナンパした女の子。

金髪のショート髪、露出度の高い服、語尾を伸ばす話し方。

言い方は悪いかもしれないが、軽そうな女の子だ。

…いや、

「軽そう」じゃない。

「軽い」んだ。

亜弓は、この街で一番有名なナンパスポットで、いつもナンパ待ちをしている。

あたしの男友達の中にも、亜弓にナンパし、一夜を共に過ごした事がある奴がいる。

あたしは、亜弓をよく思っていない。

なぜなら、あたしは悠が好きだからだ。

もうずっと前から…、きつと幼稚園の頃から。

だけど、悠への想いが許される事はない…。

あれは、1年程前
…

『紗良！紗良！』

ある夏の夕方。

突然、玄関を叩く音と、叫ぶ悠の声が聞こえた。

『どうしたの？』

なぜ悠がこんなに焦っているのかわからないあたしは、冷静に玄関のドアを開けた。

『…え』

開けたと同時に、言葉を失った。

初めて悠の涙を見たのだ。

『……………っ』

顔を真っ赤にし、泣き続ける悠。

『…悠？ねえ、どうしたの！？』

嫌な予感がし、つい声を荒げてしまう。

悠は何も答えない。

『悠？ねえ悠！』

『……………んでた』

蚊のなくような小さな声。

それでも、この時のあたしには十分大きな声に聞こえた。

“ 母さんが死んでた ”

悠は、そうはつきりと口にしていた。『…ど……して……』

頭が真っ白になった。

どうして死んだの？

交通事故？

通り魔？

最悪な状況を頭の中で思い浮かべる中、ふと気がついた事があった。

“死んでた”？

死んでたって事は…

『…睡眠薬が床に散らばったまま…』

そうだ、悠は…

その目で、母の死を見てしまったのだ。

悠は、本当にかすかに聞こえるくらいの声で話し始めた。

いつも通り帰宅すると、リビングで母が倒れていた…と。

脈をはかり、救急車を呼ばうとしたが、すでに息を引き取っていた
そうだ。

睡眠薬を飲んだ。

…つまり自殺。

『ど…して…？なんでおばさんが…っ…』

あたしは涙に濡れながら叫ぶ。

『…これ』

悠は、一冊のノートをあたしに手渡した。

あたしは、渡されたノートに書かれた文字を読み進めていく。

どうやら、おばさんが死ぬ間際に書いた日記のようだった。

…そこには、悠の父…おじさんに浮気された、おばさんの痛々しい心情が書いてあった。

『どうしたらいいの
わからない』

早く私を愛して欲しい』

『どうか戻って来て
戻って来てくれるなら
私何も望まないわ
どうか戻って来て
戻って来てくれるなら
私全てを許すわ』

…何ページにも渡って、詩のようにおじさんへの想いが綴られてい

た。

そして、ある詩を見た時…

あたしは絶句した。

『わかってるのよ

あなたは昔からいつも

隣の家に行きたがってた』

…隣の家？

まさか…

『…俺の親父と紗良の母親…デキてたらしい』

悠からのその言葉に、耳を疑った。

確かに、家族ぐるみの付き合いは多かったけど…。

あたしの両親は、あたしが10歳の時に離婚した。

今は、父親と二人暮らしだ。

当時のあたしは何もわからなかったが、父親は…気付いていたのか
もしれない。

『だ…って、あたしの母親離婚してるし…今仙台に住んでるんだよ！？』

あたし達が住んでいるのは長崎。

母は離婚した時に、実家のある仙台へ行った。

もしそうだとしたら、かなりの遠距離恋愛になる。

『…親父さ、最近よく出張だ、って家帰らなかったんだよね…疑いもしなかった…』

…お互いに、かける言葉すら見つからなかった。

…あの後、悠は父親と縁を切り、小さなアパートに暮らし始めた。

悠の父親も…仙台へと引っ越したようだった。

あたし達親子も、あの場所に住んでいられるはずがなく、学校の近くのマンションへ引っ越した。

あれから1年が経つ。

長いようで、短い1年が。

許されないことかもしれないけれど、あたしはまだ悠が好きで仕方ない。

想いは届かないけれど、傍にいたい一心で…

こうやって、毎朝悠のアパートに寄るのが日課になっていた。

ピンポン…

学校が終わると、あたしは授業のノートや課題を持って悠のアパートに来た。

「ゆう？いないのー？」

チャイムを鳴らしても、大声で呼んでも出ない。

しかし、ドアは開いていた。

「ゆう？入るよー？」

あたしは、返事が無い事を不思議に思いながらも、ドアを開け、中に入る。

玄関には、ヒールの高いパンプスが置いてあった。

頭の中が空になる。

しばらく立ち尽くしていると、奥から甲高い女の…

「あ…っあ…」

喘ぎ声が、聞こえた。

「ゆっ…っ…ゆっ…あ…」

あの女の声。

亜弓…の声。

「だい…すきっ…だいすきだよう…っゆっ…っ」

吐き気がした。

あたしは、玄関で座り込んでしまった。

立ち上がれない。

気持ち悪い。

気が狂いそうだった。

「ゆっ…っ…」

悠。

その名前を呼ぶのは、あたしだったのに。

「だい…すき…っ」

あたしの方が、ずっとずっと大好きなのに。

「…っ愛してるようっ…」

一度も言えなかった言葉。

これから先も、一度も言えない言葉。

ねえ悠。

もし、幼なじみじゃなければ…

もし、家族ぐるみの付き合いをしていなければ…

もし、あんなに近くにいなければ…

もし、ただのクラスメイトだったなら…

もし、全く違う出会い方をしていたなら…

あなたに抱かれ、

愛されていたのは

あたしだったでしょうか。

あなたの傍で、
笑いあえたのでしょうか。

もし…

【完】

（後書き）

疲れた〜（。）。１時間ちよいでばーっと書き上げました。この作品は、大人の都合で子供苦しむ事ってよくあるなーと思って書きました あと、「届かない愛」ってのもテーマでしたね 本当に自覚あるくらい駄作ですが、感想等頂けたら幸いです（・・）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4885d/>

if...

2011年1月19日21時19分発行